



TITLE:

<Book Review>Lehman, F. K., The
Structure of Chin Society, The
University of Illinois Press, Urbana,
1963,pp.xx+244

AUTHOR(S):

飯島, 茂

CITATION:

飯島, 茂. <Book Review>Lehman, F. K., The Structure of Chin Society, The University of Illinois Press, Urbana, 1963,pp.xx+244. 東南アジア研究 1964, 1(3): 100-101

ISSUE DATE:

1964

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/54832>

RIGHT:

か、もう少し簡単にみればよかったのであるまいか。

政治的統計、ことに投票状況などに就ては統計があるので、これも示して頂きたかったし、宗教に就ても項目はあるが統計が示されていない。例えば印度人と言ってもヒンズーとは限らないので、こう云う点の統計も多少古くとも示しておいて頂くと参考になる。

この種の書物は一般にすぐ古くなる憾みがある。1963年出版のかなり統計を使った OoiJin-BeeのLand, People and Economy of Malaya など本書に参照することは時間的に無理であったと思うが、今後も煩をいとわず補正して頂くことをお願いしておきたい。

(棚瀬襄爾)

荻原弘明：マンナン・ヤーザウィン第五部・第六部，鹿児島大学文科報告第十号史学篇第七集，1961年同第十二号第九集，1963年。

mnan māha jazāwin dōji: は、1920年刊の Kounbaunshē? māha jazāwin dōji: と共に、原語によって書かれたビルマ年代記の中では、最もまとまったものであり、ビルマ史研究家にとって、必読の書と言う事ができる。

この年代記は、コンバウン王朝の第七代国王バジードの命によって、1829年に、僧侶、婆羅門、王宮高官等の手によって、編纂されたものであるが、内容の大半は、十八世紀初期に、u:kala:によって書かれた māha jazāwin ji: に依拠しているといわれる。

「南方史研究Ⅲ」の中で、既に、訳者によって指摘されているように、従来、この年代記については、英訳及び仏訳が、知られていた。しかし、いずれも、完訳ではない。

今回の荻原氏の労作は、本邦初訳であるばかりでなく、英仏両訳本に欠けている部分をも、補おうとする意欲が認められ、その全訳が期待される。

鹿大文報告十の七と、十二の九に発表された第五部及び第六部は、原典第一巻の146章から150章までと、151章から161章までとに、夫々相当する部分の邦訳である。ビルマ史の上では、バガン王朝の中期から末期まで、ピンヤ・サガイン両(シャン族)王朝、インワ王朝、ハンタワディ(モン族)王朝の一部等に、該当する。訳文には、前記英、仏両訳本との対照結果に基づき詳細な註、及び元史、元史綱目、元史征綱録等中国側の文献による対照も行なわれていて、読者の理

解を、便ならしめている。

ここで、訳文について、若干の批判を呈したい。訳者は、東洋史、特に、ビルマ史の専門家として、深い知識を有しておられるが、訳文を、原文と対照してみると、全体に恣意的な訳が多いという印象をうける。殊に、訳語が不統一で、甚だしい場合には、原文の一単語に対して、四つの訳語が用いられている場合さえある。例えば、mein:maŋe に対する訳語として、〈女の子〉、〈娘〉、〈若い女〉、〈若い侍女〉の四形の使用が、認められる。

いかなる翻訳にも、つきまとう現象であるが、原語の忠実な訳だけでは、訳語としての流暢さに欠ける場合が、少なくない。従って、原文と訳文との間に、或る程度、訳者の主観的操作が加えられる事は、止むを得まい。しかしながら、「マンナン・ヤーザウィン」が、外国文学の翻訳ではなく、歴史的資料の翻訳を意図するものである以上、そのような恣意は、排除されるべきでは、なかろうか? 訳語や、訳文の表現形式は、常に、原文原語との間に、一定の対応関係を、保っているようにする事が、望ましい。

とはいえ、今回の翻訳は、誠に画期的な労作であり、ビルマに関心をもつ一人として、その早急な完訳を切望したい。

(大野 徹)

Lehman, F.K.: The Structure of Chin Society. The University of Illinois Press, Urbana. 1963. pp. xx+244

本書はイリノイ大学の research associate である著者が1957年2月から1958年8月にわたり、ビルマ西部の丘陵地帯でおこなったチン族の文化人類学的調査にもとづいて書いたものである。チン族は西ビルマからインドのアッサム州、東パキスタンのチッタゴン丘陵地帯にかけて分布する山地民であるが、本書ではビルマ領のチン族に研究の焦点が当てられている。

内容は 1 Habitat, Identity, and History of the Chin, 2 Chin Land Use and Agriculture, 3 Land Tenure and Inheritance, 4 Southern Chin Social Systems, 5 Northern Chin Social Systems, 6 Aspects of Northern Chin Economics, 7 Some Conceptual Structures in Chin Religion, 8 Chin Attitudes and Psychological Orientations, 9 Recent Social and Cultural

Changes, 10 General and Theoretical Conclusions からなっている。

著者によると、英国の植民地支配や第二次世界大戦のような外部的衝撃によってもチン族の文化や社会は基本的な構造変化を受けず、チン族の個性を保持してきたという。チン族はビルマにおいて、二重のエコロジカルな適応をおこなっている。その一つはかれらの技術水準における現地環境に対するものと、他の一つはビルマ文明に対する適応である。そのチン族はいまやビルマ連邦共和国の一員として次第にその社会にくり入れられ、tribal society から Redfield 教授などのいう peasant society に推移しつつあるという。換言すると、著者はチン社会を peasant society の初期的なものとしてとらえている。その場合に、北部チン族のように伝統的に政治組織のしっかりしているものは南部チン族のようにそれが未熟なものよりも、文化の変容に対して、適応しやすいという指摘がおこなわれているのは興味深い。このような観点から著者はチン族に接近しているのであるが、なかでも力点をおいているのは社会組織の研究である。4章と5章にかけて、本書の三分の一ほどのページ数をその分析にあてている。ここでは北部チン族と南部チン族の社会組織が比較研究されている。北部チン族は南部チン族よりも資本蓄積がおこなわれ、社会的階層分化も発達し、政治組織も強固である。南北チン族のこのような差異の原因を著者は生産技術、通商、婚姻制度、儀礼等のあり方の違いに求めて論じている。

本書全体を振り返ってみると、以上の概要にもみられるように、各所に優れた記述や分析がある。しかしながら、限られた紙面に著者はあまりにもいろいろな内容を盛り込もうとしすぎた感がある。加えて、わずか1年半のフィールド・ワークの間に3カ月とか6カ月単位で、調査村をいくつか歩き廻ったために、なにか重量感にとばしいモノグラフになってしまった。その上、各章でみられる記述や分析が本書全体を通して、一つの文脈に有機的に総合されていないのは残念である。

(飯島 茂)

Maung Htin Aung: Folk Elements in Burmese Buddhism. Oxford Univ. Press, London. 1962. pp. xiii + 140

著者U Htin Aung は Rangoon 大学卒業後 London, Dublin, Cambridge に学び、帰国後 Rangoon

大学英文学教授、1946年学長となり、その間 Burma Historical Commission 及び Burma Research Society の会長として特にビルマ民俗学の確立に努力し、その方面の権威として知られ現在はセイロン駐割ビルマ大使として外交に活躍している。Alchemy and Alchemists in Burma, Burmese Drama, Burmese Law Tales, Burmese Folk-Tales 等数多くの著作を有する。本書は1952より1958年に至る七年間ビルマ研究協会年次大会で順次発表された七篇の論文に、1958年 Atlantic Monthly のビルマ特集所録の「ビルマ仏教に於ける民俗的要素」を加え、更に本書出版に際し新たに書かれた「アリ僧侶と仏教伝来」をつけた全篇九章から成立っている。著者の先祖は三十七 Nats の一人と伝えられ、その家系に伝わる神秘信仰の為ビルマ社会に見られる超自然的要素に深い同情と関心を持つ著者は、特に外来文化である仏教に併呑され純粋性を失ったビルマ的なものを、神話伝説、或は風俗習慣の中に求め、伝えようと努力してきた。本書は今日のビルマ仏教に見られる非仏教的要素を取上げ、それ等を Anawrahta の仏教支配が確立した1056年以前の原初形態にまで逆上らせ関連づけようとする意図を以て書かれた。第一章ビルマ仏教に於ける民族的要素から、ビルマの九神礼拝、新年祭、鍊金術、魔術信仰、ナットの王大山王、三十七神、得道式、アリ僧侶と仏教伝来に至る九章は、適度の諸譚と実証性を以て論ぜられ、単に読物として面白いばかりでなく、ビルマ社会やビルマ人の根底を流れる思考を理解する上にも欠くことの出来ない知識を与えてくれる。これ等論文の中、特に九神礼拝や得道式、アリ信仰に関するものは、発表当時大きな論争をまきおこし、著者は一時批判と嘲笑の渦中に耐え忍ばなければならなかった。批判嘲笑は学問的というより、むしろ頑迷な信仰からする感情的なものであった。例えばアリは上座仏教伝来以前上ビルマにあった呪術的迷信の祭祀を行なう僧であるとする常識に対して、著者は第九章に於てそれが大乘仏教後期の密教的なものと印度教の混合であることを明らかにし、現ビルマ人の信仰する所謂純粋に仏説であるとする上座仏教の中にもこうしたアリのものが多々残されていることを指摘し、ビルマ仏教の純粋性を誇る世間的常識に頂門の一簣を与えた。本書は更に付録としてタイの新年、灯火の祭り、三十七神の詳細なりリスト、及び竜神信仰の